

# 参加者による発話行動理解への動的過程

## — 会話分析(CA)手法の言語とジェンダー研究への応用 —

岡田 みさを

### 1. 研究の背景

#### 1.1 会話分析と言語形式の機能研究

Lakoff (1975) が「女性は自分が知っていることであっても相手の確認を求めるために疑問文を多用する」と主張して以来、疑問文の機能分析の重要性は Holmes (1984) などによって主張されてきた。本稿では、会話分析 (Conversation Analysis: CA) における「参加者たちはお互いの行動をどのように理解しているか」という intersubjectivity の議論を、言語とジェンダー研究での言語形式の機能分析に応用する。議論を通じ、談話連鎖を見た微視的談話分析の、言語とジェンダー研究における有用性を提唱する。会話分析はもともと“社会学に端を発する領域”であり、“言語や、意味、コミュニケーションではなく、社会行動 (social action) を研究するためのアプローチとして出てきた” (Heritage 1995: 391)。しかし、近年の Grammar and interaction の一連の研究 (Ford, Fox and Thompson 2002) に見るように言語学領域への貢献も数多く報告されており、その参加者の相互行為を詳細に見る方法は社会学以外の分野にも広がりを見せている。

本論文では、言語とジェンダー研究での「機能」という用語を、「参加者がある言語形式や身体的動作 (笑いなど) で取っている行動」、つまり「(それらを使って) 何をしているか」 (Schegloff 1993: 105) という意味で用い、その観点から言語とジェンダー研究と、会話分析の手法とのリンクを提唱する。Goodwin and Duranti (1992: 29) によれば、会話分析の目的は、人間の相互行為に埋め込まれた行動を作り出したり理解したりするための、会話参加者たち自身による「手続き」を分析することである。

「機能」を「発話が表示している行動」と定義するならば、「機能分析」とは、まさに会話分析でいうところの、「発話が表示している行動を参加者が提示し理解する手続き」を分析するということになる。

本論文ではこの会話分析的な機能の定義に基づき、「言切り疑問文」（定義は後述する）とここで呼ぶ言語形式を含んだ発話で表されている行動を、参加者自身どのように提示し、また解釈しているかという、機能理解達成の動的過程を記述する。

## 1.2 言語とジェンダー研究における「問いの転換」：言語形式の機能分析の重要性

言語形式の機能分析の重要性について、言語とジェンダーの観点から多くの議論がなされてきた（Holmes 1984, Cameron, McAlinden, and O'Leary 1989, Freed and Greenwood 1996, Eckert and McConnell-Ginet 2003, 江原・吉井・山崎1993）。その出発点は、参加者間の言語形式の頻度を比較する量的研究（十分な質的研究を伴わないもの）に対する批判としてであった。例えば、従来、様々な疑問文の言語形式について、男女間でその使用頻度を素数のまま比較する量的方法が取られ「女性は男性より疑問文を多用する（Lakoff 1975：16）のかどうか」が問われていた。Holmes（1984）はその方法を批判し、数を数える前に男女で同じ機能をもった疑問文を比べているのかどうかを最初に明らかにする必要があると述べている。

さらに、言語とジェンダー領域の問いそのものが、1990年代以降、大きな転換点を迎えている（Bing and Bergvall 1996, Cameron 1996, Eckert and McConnell-Ginet 2003）ことも、言語形式の機能分析の重要性が再認識される理由となった。Bing and Bergvall（1996）、Cameron（1996）、Eckert and McConnell-Ginet（2003）はその経緯を次のようにまとめる：1990年代以前は、主流であった「支配の枠組み（dominance framework）」または「違いの枠組み（difference framework）」を反映して、“女性（または男性）はどのような話し方をするのか” “男女の話し方に

は違いがあるのかどうか”などが問われてきた。しかし1990年代以降は、これらの問いが含んでいる「女性（または男性）の話し方は同じである」という「本質主義的」な前提が「女性間（または男性間）の違いを軽視している」という理由から疑問視されるようになった。旧来の質問にとって代わったのは、「言語形式が実践（practice）の中でどのような意味を持っているのか（例：特定の実践の中である言語形式を使用することより、話者は自分をその場でどのような女性像または男性像に構築しているのか）」といった問いである（Bing and Bergvall 1996, Cameron 1996, Eckert and McConnell-Ginet 2003）。こういった問いは、個々の「実践の場」に根ざした特定の女性や男性による言語使用を含めた行動を記述、分析しようとしている点で「一般的に女性（または男性）はどのような話し方をするのか」という旧来の研究設問と大きく異なっている。

このような新しい問いに答えるために、特定の言語使用でその人がどのような人物像を作り上げているのかを含めた、“その言語を使用して何をしているのか”を問うことが重要になってくる。まさに言語とジェンダー研究の問いは、“言語形式と話者の社会的属性との相関関係を探る”観点から、“特定の状況に埋め込まれた使用（particular situated uses）の中の機能との関係において言語形式を分析し”，さらに相互行為を含む“談話の中でジェンダー問題を考察する”方向に移ってきているといえる（Eckert and McConnell-Ginet 2003：4）。

現在、言語とジェンダー領域では前述のような基本的問いの転換と相まって、機能分析の重要性が再認識されている。しかし今後の課題として、どのようにして機能を特定すればよいかという問題が残っている。例えば、従来の言語とジェンダー研究での疑問文の機能は、トーク(talk)、身体的行動、人工物の使用なども含んだ談話連鎖の中で、1つ1つの発話を追いつながりながら局面局面(moment-by-moment)に分析されたものではなかった。本論文では、会話分析の手法に基づいた談話連鎖分析を言語とジェンダー研究での機能研究に応用して、新たな考察を試みることを目的とする。

## 2. データ及び言切り疑問文の定義

本論文のデータは、中部地方の大学のオーケストラクラブの9つの会議、約10時間をビデオ撮影または録音して書き起こしたものをを用いた。18人の女子大学生、12人の男子大学生の使用する52種類の文末表現（終助詞など）の頻度を Okada (2001)で調べた結果、言切り疑問文は10時間中806例と、他の文末形式と比べて高い頻度を持つものの一つだった。ここで言う言切り疑問文とは、名詞、形容詞／動詞の普通体で聞かれる疑問文で、益岡・田窪 (1992 : 224) でいう「明日のパーティ出席する？」のような言語形式を指す。

全体で806例の言切り疑問文のうち、本論文では、特に会話1の6行目で示すような、オーケストラクラブの仕事に関する前の話者の「指示」(…にします、名前(にして))、「提案」(…しようよ、…しない?)のすぐ後に続く140例の「リペア開始」(Schegloff, Sacks, and Jefferson 1977 : 377)の言切り疑問文に焦点をあてた。Schegloff et al. (1977 : 377)は、「リペア開始」を「前のターン中で理解できなかった部分を特定するもの」と定義している。下の会話1では、女性スタッフ3人が、年度始めの新人部員募集のためのポスター貼りの仕事をどの部員に割り振るか話し合っている。5行目でマネージャーのえみが「めぐちゃん(にその仕事を割り当てる)」という指示を出して、それに対し、はなが6行目で「いい?(めぐちゃんを)使っちゃって」という「リペア開始」を行っている。はなは、えみの「めぐちゃん」という指示が、ポスター貼りの仕事にめぐちゃんという部員を割り振ってもよい、という意味かどうかを尋ねている。

会話1 :

- 1 はな : 女の子下宿生少ないのかな
- 2 (2.0)
- 3 ともみ : でよくないか?
- 4 (4.0)

- 指示 5 えみ： めぐちゃん。
- 言切り疑問文 6 はな： いい？使っちゃって。
- 7 えみ： うん。
- 8 はな： [((6秒間, 名前を人決めの表に記入する))
- 
- 次のタスクへ 9 えみ： と, 後はー。
- 10 はな： かなちゃん わかんないもんね。
- 11 えみ： うん. まりちゃんか。

会話1の6行目のようなタイプの言切り疑問文を選んだ理由として、Okada (2001) の分析で、他のカテゴリーの言切り疑問文、例えば「リペア開始」でないものや、「リペア開始」であっても仕事に関係のないものに比べ、表面的に男女の言切り疑問文使用の頻度の差が大きいことがわかったことが挙げられる(表1参照)。言語とジェンダー領域では、Lakoff (1975) 以来、(女性の育てられ方も含めた)話し手の性(sex/gender)そのものがその話者の疑問文使用に影響を与えているかどうか問われており、そういった背景も考慮してこの言切り疑問文を分析対象とすることにした。

表1 言切り疑問文の男女の使用頻度

	女性 (N=18)	男性 (N=12)	合計
言切り疑問文	115	25	140
総発話量 <sup>1)</sup>	57,826	46,031	103,857

### 3. 本稿及び関連研究 (Okada 2001, 査読中) の概要

本稿では Okada (2001, 査読中) の分析の基礎となった言い切り疑問文の3つの機能：前の話者の指示／提案に対する (1)「確認要求」、(2)「反対」、(3)「そのどちらでもないもの」の参加者たちによる認定の過程を記述する。

本稿で示した機能認定過程の分析を経て、Okada (2001, 査読中) では、たとえ表1のような男女間の言切り疑問文使用の頻度の差があったとして

も、話者の性 (sex/gender) そのものが影響しているとは言い切れず、個々の話者の言切り疑問文使用には、言切り疑問文の前後の談話で男女が頻繁に従事している「活動」(例：指示を出すなど) が影響していることを指摘した。例えばある男性話者は主幹としてその会話で指示を出す活動にほぼ単独に従事しており、自分に向かって自分の指示を聞き返す言切り疑問文を使うことはない。従って、この男性話者は前の話者の指示の後という環境では「確認要求」の言切り疑問文をほとんど使っていなかった。それに対し他の部員達はオーケストラクラブの主幹またはマネージャーの指示の後、「確認要求」の言切り疑問文を頻繁に使っていることがわかった。

さらに Okada(2001, 査読中)では、言切り疑問文使用に影響すると考えられる「どの話者がどんな活動に頻繁に従事しているか」という点で、このオーケストラでは男女の偏りがあることを指摘した。このオーケストラでは「男性が主幹を務める」という過去20年来の慣習があり、それは前述の主幹の男性が「指示を頻繁に出す」という活動に単独でしかも頻繁に従事していることと無縁ではない。

これらの分析のジェンダー研究における意義として次のようなことがいえる。「指示を出す」という主幹としての活動がこの男性話者の、指示の直後での言切り疑問文を使う機会の少なさに影響を与えていたことを考えると、個々の話者の「活動」と、(慣習という意味での) ジェンダーとの「交差」(Bing and Bergvall 1996) を考えざるを得ない。言語とジェンダー領域では、Lakoff (1975) 以来、話者のジェンダーそのものがその話者の疑問文使用に影響を与えているかどうか問われてきた。しかし、Okada (2001, 査読中)では、まさに Bing and Bergvall (1996)の指摘通り、旧来の問いが含む「話者のジェンダーをそれ自体を独立した変数としてとらえる」という前提を問い直し、ジェンダーは、慣習による男女間の「活動」の不均衡な分布に“媒介 (mediate)” (Ochs 1992) されるかたちで、“間接的に” (Ochs 1992), 参加者の言切り疑問文使用に影響を与えていたことを指摘した。

以上 Okada (2001, 査読中)の概要を説明したが, Okada (2001, 査読中)で示した, 言語とジェンダーに関する考察を支えたのが, 「言切り疑問文を使って取っている行動を, 話者はどう提示し, 周囲の参加者はそれをどう解釈しているか」を見た微視的会話分析である. 本稿ではその機能認定の過程を詳細に記述する. 参加者間の相互行為の中で動的に機能が理解されていく過程の例として以下のものを認定した:

- 1) 「確認要求」の機能理解に至る過程: 言切り疑問文の直後に, 返答者によりその言切り疑問文の「確認要求」の解釈が提示され, それが後続の談話連鎖で言切り疑問文の使い手により追認されている例 (下の5.1). この「確認要求」の言切り疑問文は「クラブの主幹またはマネージャー」の指示の後, 他の部員たちによって多用されていた,
- 2) 「反対」から「確認要求」の機能理解に至る過程: 言切り疑問文の直後に, 返答者により「反対」の解釈が提示されたが, 言切り疑問文の使い手がそれを訂正しより適切な言切り疑問文の理解を求めている例 (下の5.2),
- 3) 「確認要求/反対のどちらでもないもの」: 言切り疑問文の返答者が一度提示されかけた機能を再定義しているもので, 「確認要求, 反対のどちらでもない」という機能を認定した例 (下の5.3). 1人の女性マネージャーの, 他の部員の指示に対する言切り疑問文にはこの「確認要求, 反対のどちらでもない」という機能が多く見られた.

これらの分析を通じ, 時間軸に沿って進む談話連鎖の中で, 参加者によって, 言切り疑問文の解釈の提示, その確認, 再定義など「(言切り疑問文の)意味の交渉」が行なわれており, 機能を認定するには, その交渉の動的過程に注目した微視的な談話分析が必要であることを示した.

4節では, 会話分析の手法がどのように言語の機能分析に貢献するかについて, 会話分析の先行研究を援用して具体的に述べる.

#### 4. 機能認定に関連した会話分析の方法論：intersubjectivity の議論

「発話を使って話者が示している行動」(＝本論文でいう発話機能)は言語学の一領域である speech act theory (Austin 1962) では “illocutionary force” と定義される (Levinson 1983 : 236). Heritage and Atkinson (1984 : 14) はこの “illocutionary force” という用語を使って会話分析の方法を次のように言い表わしている：(会話分析の方法では) “発話の illocutionary force 分析の際に，(発話の連鎖の中の) 場所 (placement) にその決定的な重要性を置く” (Heritage and Atkinson 1984 : 14). この引用からも窺えるように，会話分析の要諦の一部は，「(ターンを) 作り出す中で連鎖している行動に対する注目」及び「相互行為的な意味を創出し解釈すること」(Ford, Fox, and Thompson 2002 : 7), およびその意味創出，理解の “手続き” である。

では，会話連鎖に見られる，お互いの行動を理解する参加者の手続きとは，具体的にどのようなものか。Heritage (1984b : 254-60) は参加者たちのお互いの行動の理解，すなわち “その会話の状態 (‘the state of the talk’) の理解” (intersubjective understandings と呼ばれる) は，“一つ一つの発話の順に (‘turn-by-turn basis’)” 示されると述べている。

‘Turn-by-turn basis’ で達成される理解とは，どういうことか。まず，会話分析では返答は聞き手の最初の話者の発話への理解を表示していると考え (Heritage and Atkinson 1984 : 7). 例えば，会話2と会話3で，二番目の話者 A が最初の話者 B の発話をどのように理解しているかを観察すると，会話2では，話者 A は「すみません」という「謝罪」で話者 B の発話に返答し，そのことによって話者 A は話者 B の発話を「不平」と理解していることがわかる。それに対し，会話3では，話者 B の会話2と全く同じ発話に対し話者 A は「(招待の) 受諾」で応答している。そのことによって，話者 A は話者 B の発話を「招待」として解釈していることがわかる (Heritage 1984b : 255).



## 会話 2

(Invented)

B: 時々は私のところに来たらどうですか  
why don't you come and see me sometimes

A: すみません. 最近ひどく忙しいんですよ.  
I'm sorry. I've been terribly tied up lately  
(Heritage 1984b : 255)

## 会話 3

(SBL : 10 : 12)

B: 時々は私のところに来たらどうですか  
why don't you come and see me some[times

A: [そうしたいです.  
[I would like to

(Heritage 1984b : 255, 翻訳 岡田)

このように、二番目の話者 (例の話者 A) は、返答により、前の発話に対する理解を示し、また、“最初の話者 (例の話者 B) は、二番目の話者の返答によって、自分の意図が適切に理解されたかどうかを判断することができる” (Heritage 1984b : 256)ということになる。

「相互行為的な意味」理解の話者による 'turn-by-turn' の「手続き」はさらに続く。“二番目の話者は自分の返答で表された (最初の話者の発話に対する) 理解が適切であったかどうかを、最初の話者による 3 番目の発話で見ることができる” のである (Heritage 1984b : 257). 例えば、Heritage (1984b) は、Schegloff (1979) から引いた会話 4 で、最初の話者 A が二番目の話者 Z による自分の発話への理解が不適切であるとして、“third position repair” と呼ばれる 3 番目の発話で明示的に話者 Z の理解を訂正している例を示している。

## 会話4

(CDHQ : I : 52)

A : どれとどれが閉まっいて、どれとどれが開いているんですか。

Which one::s are closed, an' which ones are open.

Z : ほとんどのものです。これ、これ、[これ、これ ((指差しながら))

Most of 'em. This, this, [this, this ((pointing))

A : [小屋の上の物じゃなくて、道にある物で、という意味です。

[I 'on't mean on the shelves, I mean on the roads.

(Heritage 1984b : 257)

これらの例が示したように、発話の機能(例:会話2, 3, 4での最初の発話の機能)を見るためには、参加者がその発話で表されている行動を解釈したり、相手のそういった解釈を“モニター”(M.H.Goodwin 1980)している、「intersubjective understanding を達成する過程」を観察しなければならない。疑問文という特定の言語形式を含んだ発話を見る際にも、このような局面局面の談話連鎖分析が、疑問文の意味の理解を達成する過程を観察可能にする。この理由から、本論文では、「言切り疑問文」という言語形式の機能を談話連鎖分析によって調べることにする。

### 5. 参加者たちが言切り疑問文の前後で取っている行動の記述

この章では、機能が理解されていく動的過程を、言切り疑問文の直後に、相手によりその言切り疑問文の解釈(「確認要求」)が提示され、それが後続の談話連鎖で追認されている例(5.1)、言切り疑問文の直後に、相手により「反対」の解釈が提示されたが、言切り疑問文の使い手がそれを訂正し、より適切な「確認要求」という言切り疑問文の理解を求めている例(5.2)、言切り疑問文の相手が、一度提示されかけた「確認要求」の機能

を再定義している例 (5.3) を通して示す。

### 5. 1 「確認要求」の機能理解に至る過程

本論文では、次の表2の談話連鎖の中で使われている言切り疑問文を「確認要求」とした。140例の言切り疑問文のうち、56例は、表2で示される談話連鎖を持っていた。

表2 「確認要求」の言切り疑問文認定の談話連鎖

1. A: 指示または提案
2. B: 言切り疑問文 (確認要求としてのリペア開始)
3. A: 確認
4. B: Aによって確認された情報を受け入れ, Aの指示または提案に従う

この談話連鎖では、話者による、相手の理解に対する「モニター」(M. H. Goodwin 1980)が見られた。例えばM. H. Goodwin (1980: 309)は「話者が、聞き手が示す自分の発話の理解に問題がないとしている時、記述の新しいセクションに移る」と指摘する。表2の談話連鎖でも、言切り疑問文が適切に理解されたとして、言切り疑問文の使い手やその相手がこの談話連鎖の直後に明示的に次のタスクに移っている例が、数多く観察された<sup>2)</sup>。

例えば前述の会話1は、表2の談話連鎖を含んでいるが、ここでもお互いに相手の自分の発話に対する理解に問題がないとして、この談話連鎖の直後二人の話者は、次のタスクに進んでいる。この会話では、女性スタッフ2人が、年度始めの新人部員募集のためのポスター貼りの仕事をどの部員に割り振るか話し合っている。

会話1の5行目でえみが指示を出して、はなが6行目で「いい? (えみちゃんをこの仕事に) 使っちゃって」と言切り疑問文で聞いたあと、えみ

は「うん」という確認を与えている。ここでえみは、はなの言切り疑問文が確認要求であると分析し、それに適切であると彼女が考えた答を提示している。はなは、8行目で、そのえみの解釈が適切であることを、えみの指示を人決め表に書き込む作業、つまりえみの指示に従う作業によって示している。

その後、えみは9行目で「と、後は一」と言って、明示的に次の人選に移っている。えみの次の人決めに移る行動は、はなの言切り疑問文以降、二人の話者のお互いの行動に対する理解に問題がなかったことを示している。はなも10行目で、「かなちゃん」という次の候補者名をあげることによって、次の人選への移行が行われたことについて、えみと一致した理解を示している。

このように、会話1では言切り疑問文に対して相手（えみ）が確認要求の解釈を示し、それが次の位置で言切り疑問文の使い手（はな）により追認された。はなは、人決め表記入という人工物使用により、自分の言切り疑問文に対する相手の解釈に問題がないことを示した。5.2では、表2の連鎖が乱れている談話で使われている言切り疑問文を示す。その中でも言切り疑問文の相手が、言切り疑問文に「反対」の解釈を示しているものを見る。

## 5.2 「反対」から「確認要求」の機能理解に至る過程

言切り疑問文が前の話者の指示に対する「反対」を表すという解釈を前の話者が示す例、または、言切り疑問文の使い手が表2の談話連鎖の中で実際に明示的な反対を示す例は、140例中29例とわずかだが存在する。ここでは特に、言切り疑問文の直後に相手によって「反対」の解釈が示されたものが、実は「確認要求」だったと話者がその後訂正している例を示す。ここでも、話者の相手の理解のモニターが見られる。

リペア開始の発話が反対を示すと相手が解釈する可能性があることは、会話分析の先行研究で示されている。Pomerantz (1984: 70)は、リペア開始の発話は、「賛成が期待されているときに反対を表すための典型的なター

ンのかたち」を作る「delay devices」の一つであると言う（日本語への応用は Mori (1996)）。つまり、話者はリペア開始の発話を出すことによって、次に反対を表示することを警告する。そして聞き手は、リペア開始の発話を聞いたらすぐに次に相手の反対が来るであろうと予測し、実際の反対が来る前に、相手の反対に対応するような反応を示すことがある (Okada 2001, 西阪仰氏私信)。

次の会話5では、セクションリーダーたちが練習のスケジュールを話し合っている。ここでも、前の話者の「指示」に後続するリペア開始の言切り疑問文の直後、前の話者は、言切り疑問文が自分の指示に対する反対を示す、と受け取ったかのような反応を示す。しかし、Pomerantz (1984) の分析と違うことは、この会話ではその後、言切り疑問文の使い手が、言切り疑問文が反対ではなくて、実は確認要求であったと直接訂正することである。このように、会話5でも話者による相手の理解のモニターが見られ、相手の理解が不適切であり、話者が適切な理解を求めている過程が観察できる。

会話5：

指示                   1   たかし： 22日月曜日はひと枠だけ、ひと枠だけー  
練習やってー、ふた枠目は強練 (=たか  
しの言い間違い。「強化ミーティング  
(略：強ミ)」の意) ね。

(2行省略)

言切り疑問文    4   まさこ： 強ミ？

「反対」の解釈   5   たかし： いや25日はーやるとー強ミはさー1年生  
6                   入れないもんでー。

訂正／聞き直し   7   まさこ： あ 違う違う。22日「夜枠」じゃなくて  
8   たかし： うん。

- 9 まさこ： 2 枠目に「強ミやっちゃうの？」  
確認 10 たかし： [2 枠目に強ミ。  
11 まさこ： ((うなづく))

会話5の1行目で、たかしは22日の練習予定について指示を出す。それに対し、まさこは4行目で言切り疑問文を出す。ところが5行目でたかしは、なぜ強化ミーティングを22日にして25日にしなかったのかと、まさこの言切り疑問文が自分の決めた予定に反対しているかのような解釈を示す。しかし、まさこは7行目で、この解釈について「あ、違う違う」と明示的に訂正し、「22日「夜枠」じゃなくて、2枠目に強ミやっちゃうの？」と疑問文を言い直すことによって、単なる22日の練習枠の時間の確認要求であったことを示す。これについてたかしは10行目でそうだという確認を与え、11行目でまさこは、うなづいてその指示を受け入れたことを示す。

この例でも、参加者自身によって示された言切り疑問文の意味の交渉の過程を見た。これは前述(本稿第4節)の Heritage (1984b) が Schegloff (1979) 引用で示した、“3番目の場所でなされるリペア (“third position repair)” の例である(会話5における“3番目の場所でなされるリペア (“third position repair)” は7行目および9行目)。Heritage (1984b) の英語の例と会話2に共通していることは、発話に二つの解釈(例：前の発話への反対、又は確認要求)が可能である場合、研究者がどちらの解釈をとるべきか迷うだけでなく、参加者にとっても同様な迷いが存在しているということである(Levinson 1983 : 329-31)。詳しい談話連鎖の分析は、参加者自身が時間軸に沿った談話の中でそれら二つの解釈とどう対峙し、どのように一方の解釈を採択しているかを観察可能にする(Levinson 1983 : 329-31)。次の章では、「確認要求/反対のどちらでもない」機能認定の例を示す。そこでは、参加者による言切り疑問文の機能のモニターではなく、談話が進んでいく中で、言切り疑問文への答え方が言切り疑問文の機能を再定義していることに注目した。

### 5.3 一度提示されかけた機能の再定義：「確認要求／反対のどちらでもない」機能

140例の言切り疑問文のうち、55例で、「確認要求／反対のどちらでもない」機能を認定した。この機能は、表2の談話連鎖は乱れてはいるが、言切り疑問文に対する「反対」の解釈は示されていないものであった。ここでは「確認要求」に附随する、言切り疑問文の使い手と聞き手の間にある知識の差という観点から、表2の談話連鎖からの逸脱を論じる。話者間の知識を分析する際は、Heritage (1984a : 315-320) による「リペアを求め人」と「前の話者」の間の、知識の状態の違いの考え方を応用した。Heritage (1984a)は、表3の「リペア」を表す談話連鎖を示して、「リペアを求め人」である話者Bは、前の話者Aの発話がわからないからリペアを求めて聞き返し（第2ポジション）、Aがそれを説明して（第3ポジション）、Bが前に知らなかったことを今知ったことを示す標識「oh」を用いて、Aの説明が情報を与える有益なものであったことを認める（第4ポジション）、という参加者の行動の連鎖を特定した。さらに、「oh」は、問題が解決されたことを示すので、参加者達は、しばしばこの標識のあと、「リペア」を表す談話連鎖から抜け出ると、Heritage (1984a : 318) は言う。

表3 「リペア」を表す会話連鎖 (Heritage 1984a : 319, 括弧内は筆者註)

1. A : Repairable
2. B : Repair initiation (不明な点について確かめる)
3. A : Repair (不明な点を解消)
4. B : "Oh" receipt (前に知らなかったことを今知ったことを示す)

この談話連鎖でローカルに確立される、知識の状態の違いについて、Heritage (1984a) は、リペアを出して相手が理解できない点を解消する

人（話者 A）は、リペアを求める人（話者 B）よりも知識の状態が上であると主張する。さらにその知識の状態の差は、リペアが出されて解消すると言う。表 3 の会話連鎖に特定の役割として、リペアを出す人は「informative, knowledgeable, or authoritative」な人として示されていると Heritage (1984a : 315) は述べている。

Heritage による表 3 の会話連鎖は、本稿 2 節で示した会話 1 の「確認要求」の会話で、はながマネージャーのえみに、言切り疑問文でリペアを求めている会話連鎖にあてはまる。はなは、えみの指示に理解できない点があつて、「いい、使っちゃって」という言切り疑問文をえみに向ける。そして、えみの「うん」という確認でその理解できない点を解消し、はなは、表記入をすることができた。両者は、表記入の後、「リペア」を表す談話連鎖から抜け出て、次のタスクに移っている。Heritage (1984a : 315) を応用すると、会話 1 では、マネージャーえみとはなの知識の差が可視化され、えみは「informative, knowledgeable, or authoritative」な人として示されている。

これに比べて、次の会話 6 では、立場が逆転して、マネージャーであるえみが言切り疑問文を出して、はながそれに答える。ここではえみとはなの間で、会話 1 で見えたような知識の差が見えない。はなは、えみの言切り疑問文に答える際に、自分だけが見ている「人決めの表」を調べて答えるが、そこに載っている情報について、自分の知識を否定する言い方を用いる。

会話 6 の参加者たちは、クラブの新人勧誘の仕事をする人を決めているのだが、ここで問題になっているのは、新入生説明会の「前」と「最中」に別々の人選が必要かどうかということである。はなが見ている「人決めの表」には「説明会」という文字の右上方に、「2名」という必要人員が書かれているだけで、これが説明会の「前」だけの人選で、説明会「最中」には別の人選が必要かどうか明白ではない。しかし、はなは、この表を説明会の「前」と「最中」はまとめて一つの人選でよい、と読み取り、それ



を最初主張する。しかし会話が進むに従ってそれを自分の解釈として述べずに、その情報から距離をおいた言い方に変化させる。

会話6：

説明会「前」に 1 えみ： 鈴木よしこちゃんと(1.0)山田ゆみちゃん。  
勧誘をする人 2 はな： ((名前を人決めの表に記入する))  
の人選

---

次のタスクへ 3 はな： ((人決めの表の上で指を前後させながら  
次の人選はどの行事について行うべきかを  
探している))

説明会「最中」 4 えみ： でそのあと説明[会中？  
の人選 5 はな： [((人決めの表の一箇所を  
指で指す))

指示 6 はな： 終わった。((指をそこに置いたまま))

言切り疑問文 7 えみ： 終わっ[た？ それは。

確認 8 はな： [うん。((指をそこに置いたままうな  
づく))

知識の否定 9 終わってるのかな。[いやよくわからない。

10 えみ： [その二人 今の二人

11 は説明会中もずっと。

表に責任を 12 はな： うん。みたい。これで見るとね。

負わせる

13 えみ： ふーん。

1行目で、えみがこの表の「説明会」という文字の右上方にある「2名」の人選に、「鈴木よしこちゃんと一、山田ゆみちゃん」の二人を指名する。

はなは2行目で、二人の名を「2名」という文字の右側に書き込む。はなは、表記入の直後3行目で、この表の上で次の人選をすべきタスクを探し、5行目で表の一部を指差す。また、はなの探す動作の始まる点から少し遅れて、4行目でえみは、「でそのあと説明会中？」と言って、今終わった2名の人選とは別に、説明会の「最中」も人選をしなければならないのかどうかを、はなに聞く。

えみのこの質問に対し、はなは、この人決め表に指を置いたままで、「終わった」<sup>3)</sup>、つまり説明会中の人選も、今さっき終わった二人の人選と一緒に終わったから、説明会の「最中」に別個の人選は必要ない、と主張する。

えみがそれに対し、7行目で「終わった？それは」と言切り疑問文を発して、リペアを求める。しかし、この言切り疑問文に答えるのに、はなが会話1のえみと違うところは、えみは「うん」とだけ言って確認を与えたのに対し、はなは「うん」と言って確認を出したものの、「終わってるのかな、いやよくわからない」と言って、自分の知識を否定して、自分が前に出した「新入生説明会の最中の人選はもう終わった」という指示から距離をとる。この8、9行目で、はなの答え方が確認の「うん」から「わからない」に変化している。

さらに、えみは10行目で、「その二人、今の二人は説明会中もずっと」と聞いて、この説明会の「前」に新人勧誘をする「鈴木よしちゃんと山田ゆみちゃん」が説明会中もずっと同じ仕事をするようになっていたのか、と聞く。はなは、それに対しても12行目で「うん、みたい。これで見るとね」といって、自分の指示の責任をこの人決め表に負わせている。これも会話1で、えみが自分の指示に対し「うん」といって責任をとっているのと対照的である。ここで、はなは情報に対し距離をおいて自分の知識として提示していない。従って、このはなの行動を Heritage (1984a) の観点から見ると、はなは、自分を「informative, knowledgeable, or authoritative」な人として示していないことになる。はなは、えみの言切り

疑問文を「確認要求」と解釈してはいるが、はなの返答は知識提示としての十分なステイタスを備えていない。また、えみの言切り疑問文が自分の指示に対する反対を表すというはなの解釈も、示されていなかった。これらの理由から、この会話の言切り疑問文の機能は「確認要求／反対のどちらでもないもの」に認定できる。

## 6. 考察：頻度分析の基盤としての機能分析

本稿で示したような機能理解過程の微視的談話分析により、Okada (2001, 査読中) では「個々の話者が言切り疑問文の前後で頻繁に取っている活動は何か (例：「指示」なのか「確認要求」なのか)」が明らかになった。例えば、「確認要求」認定の過程を経て、このオーケストラでは、クラブの主幹またはマネージャーの指示の後、他の部員 (例えば会話1の話者はな) が「確認要求」の言切り疑問文を頻繁に使っていることがわかった。Heritage (1984a) を応用すると、ここで参加者達は主幹またはマネージャーを「informative, knowledgeable, or authoritative」な人、つまり「知識ある人」として示していることになる。

これに対し、主幹やマネージャーは他の部員を「知識ある人」として示していなかった。例えば1人の男性主幹 (会話2の話者たかし) はほぼ単独で指示を出しており、彼自身が誰かの指示の後で「確認要求」の言切り疑問文を使う機会は少なかった。また、1人の女性マネージャー (会話3の話者えみ) は、部員 (はな) の指示の後、言切り疑問文を頻繁に使ったが (はなはマネージャー等の役職についていないが、人決め表を唯一持っている参加者なので、その情報に基づいて指示を出すことができた)、これらの機能は、はなの返答により「確認要求／反対のどちらでもない」言切り疑問文が多いことがわかった。はなは、知識を人決め表に帰属させ、自分を「informative, knowledgeable, or authoritative」な人として提示していなかった。Okada (2001, 査読中) では、男性主幹たかしと女性マネージャーえみの言切り疑問文の頻度を比較して、女性マネージャーは男性主幹に比べて言切り疑問文を頻繁に使っていることを示したが、彼女の

言切り疑問文は相手を「知識ある人」として提示するものではないことが観察された。本稿で示された「個々の話者の活動の分析」は、この学生オーケストラにおける「男女間の不平等な役職任命」との関連からジェンダーについての考察に発展していった。

本論文で例示してきたような、参加者が疑問文によって表される行動をどう解釈し、さらに相手の理解をどうモニターするのか、といった機能認定の過程は、これまでの言語とジェンダー領域の分析で十分に記述されていなかった。しかし機能を認定するには、言切り疑問文への答え方や表記入などの動作が、機能理解の過程に示す役割に注意して分析を進める必要がある。機能認定に影響しているローカルな談話に特定の要素には、例示してきたように、人決めタスク中で用いられる表などの人工物使用も含まれる。Goodwin and Goodwin (1998 : 72) は「相互行為の中のトークと、道具のある環境はお互いに情報を与えあいお互い（の意味）を形成しあっている」と指摘している。トークが道具に意味を与える例として、記録用の書類として、また次に何を話し合うべきかを調べるリソースとして、その時のトークにとって適切な意味を持つよう、話者が様々に表を組織化していることが挙げられる。またその一方で、言切り疑問文への答の直後に起こった記録としての表の使用が、その答によって示された、言切り疑問文の機能の解釈が正しかったことを表す場合もある。このように、トークとタスクの中で用いられる道具は、「相互反映的」(Goodwin and Goodwin 1998 : 70)な意味を持っており、この点で機能は、タスク遂行に関連した具体的な表などの事物と分かちがたく結びついていることに注目しなければならない。

#### 謝 辞

この論文作成の過程で、西阪仰氏から、貴重なコメントをいただいた。心より感謝したい。

## 注

- 1) Jorden (1990) を参考に、ローマ字による分かち書きを行い、それを数えた。
- 2) Heritage (1984a) による、英語の会話分析でも、リピアの前後で、類似した会話連鎖が観察された。Heritage (1984a) と、会話 1 の類似点については、5.3 で詳述する。
- 3) 会話 3 の 6 行目「終わった」を、「指示」と解釈した理由は、この発話が、これから会議で何を話し合うべきかを指示していると、考えられることである。

## 参考文献

- Austin, J.L. 1962 *How to do things with words*. Oxford: Oxford University Press.
- Bing, J.M., & Bergvall, V.L. 1996 The question of questions: beyond binary thinking. In V.L.Bergvall, J.M.Bing, and A.F.Freed, (Eds.), *Rethinking language and gender research: theory and practice*. NY: Longman. Pp.1-30.
- Cameron, D. 1996 The language-gender interface: challenging co-optation. In V.L.Bergvall, J.M.Bing, & A.F.Freed, (Eds.), *Rethinking language and gender research: theory and practice*. NY: Longman. Pp.31-53.
- Cameron, D., McAlinden, F., & O'Leary, K. 1989 Lakoff in context: the social and linguistic functions of tag questions. In J. Coates & D. Cameron, (Eds.), *Women in their speech communities: new perspectives on language and sex*, NY: Longman. Pp.74-93.
- Eckert, P. & McConnell-Ginet, S. 2003 *Language and gender*. NY: Cambridge.
- 江原由美子・好井裕明・山崎敬一 1993 性差別のエスノメソドロジー:対

- 面的コミュニケーション状況における権力装置 れいのるず・秋葉か  
つえ (編) おんなと日本語, 有信堂高文社 Pp.190-228.
- Ford, C.E, Fox, B.A., & Thompson, S.A. 2002 Introduction. In C. E.  
Ford, B. A. Fox, & S.A. Thompson, (Eds.), *The language of turn and  
sequence*. NY: Oxford. Pp. 3-13.
- Freed, A.F. & and Greenwood, A. 1996 Women, men, and type of talk:  
what makes the difference? *Language in Society* 25. 1-26.
- Goodwin, C. & Duranti, A. 1992 Rethinking context: an introduction,  
In A. Duranti & C. Goodwin, (Eds.) *Rethinking context: language  
as an interactive phenomenon*. NY: Cambridge. Pp. 1-42.
- \_\_\_\_\_ & Goodwin, M. H. 1998 Seeing as a situated activity:  
formulating planes. In Y. Engeström & D. Middleton (Eds.),  
*Cognition and communication at work*, NY: Cambridge. Pp.61-95.
- Goodwin, M. H. 1980 Processes of mutual monitoring implicated in  
the production of description sequences. *Sociological Inquiry* 50,  
303-17.
- Heritage, J. 1984a A change-of-state token and aspects of its  
sequential placement. In J. M. Atkinson & J. Heritage, (Eds.),  
*Structures of social action: studies in Conversation Analysis*. NY:  
Cambridge. Pp.299-345.
- \_\_\_\_\_. 1984b *Garfinkel and Ethnomethodology*. Cambridge: Polity  
Press.
- \_\_\_\_\_. 1995 Conversation Analysis: methodological aspects. In  
U.M. Quasthoff, (Ed.), *Aspects of oral communication*. Berlin:  
Walter de Gruyter. Pp.391-418.
- \_\_\_\_\_, & Atkinson, J. M. 1984 Introduction. In J.M. Atkinson  
& J.Heritage, (Eds.), *Structures of social action: studies in  
Conversation Analysis*. NY: Cambridge. Pp. 1-15.

- Holmes, J. 1984 Hedging your bets and sitting on the fence: some evidence for hedges as support structures. *Te Reo* 27. 47-62.
- Jorden, E.H. 1990 *Japanese: the spoken language*. vol. 3. New Heaven: Yale University Press.
- Lakoff, R. 1975 *Language and woman's place*. NY: Harper and Row.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. NY: Cambridge University Press
- 益岡隆志, 田窪行則 1992 基礎日本語文法 一改訂版一 くろしお出版
- Mori, J. 1996 Negotiating agreement and disagreement: the use of connective expressions in Japanese conversations. *University of Wisconsin-Madison: Ph. D. dissertation*.
- Ochs, E. 1992 Indexing gender. In A. Duranti & C. Goodwin, (Eds.) *Rethinking context: language as an interactive phenomenon*. NY: Cambridge University Press. Pp.335-58.
- Okada, M. 2001 The use of nonparticle questions among women and men in Japanese spontaneous conversation. *University of Minnesota: Ph. D dissertation*.
- \_\_\_\_\_. (査読中) Speakers' sex or discourse activities?: micro discourse-based accounts for usage of nonparticle questions in Japanese.
- Pomerantz, A. 1984 Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage, (Eds.), *Structures of social action: studies in Conversation Analysis*. NY: Cambridge. Pp.57-101.
- Schegloff, E. A. 1979 Repair after next turn. Unpublished paper presented at the Conference on Practical Reasoning and Discourse Processes, St Hugh's College, Oxford.
- \_\_\_\_\_. 1993 Reflections on quantification in the study of conversation. *Research on language and social interaction*, 26(1), 99-128.

\_\_\_\_\_, Jefferson, G., & Sacks, H. 1977 The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language* 53, 361-82.